

## 論文の内容の要旨

論文題目 茅盾的「作家精神」の形成と発展に関する研究

氏 名 白 井 重 範

本稿は、20世紀中国において様々な意味で大きな位置を占めた作家茅盾の、「作家精神」について、それが誕生し発展していく様を、主として彼の小説を読解することから跡付け、茅盾文学の性質と特徴とを明らかにしたものである。まず序章において、茅盾が作家としてデビューするまでの伝記的側面を概観した上で、本稿の目的と立場を示した。第1章「『蝕』三部作精読—人物像を中心に」では、茅盾の処女作である『蝕』三部作について、作中人物の性格的特徴や足取りおよび革命観を整理しながら、プロットを詳細に説明した。第2章から第7章までは「作家精神の形成」と題し、『蝕』三部作や短編小説集『野薔薇』の分析を通して、茅盾が国民革命失敗の衝撃を経て、「幻滅」から立ち直る中で、それまでの社会運動家や文芸評論家としての彼にはなかった新しい精神状況が生じたことを確認した。第8章「茅盾と現実—1930年前後」と第9章「革命文学について—茅盾と銭杏邨」では、茅盾の作家精神が当初の自己省察から発展する契機と、発展の方向について考察した。終章「『子夜』私論」では、茅盾の代表作である『子夜』において、本稿で提示した作家精神がどのように作用しているかを明らかにした。

茅盾は多くの社会的な顔を持ち、優れた小説をものした「作家」以外に、1920年代初頭には、はやくも中国新文学を理論的に牽引する「文芸評論家」として活躍しており、1925年には中国の無産階級革命文学について最初の本格的な論文を発表している。中国共産党創立以来の党员でもあり、中共中央の連絡員や宣伝工作の責任者としても活躍した。やがて人民共和国成立後には、文化部長として共産党政権の文化政策の最高責任者として、文学制度化の立役者ともなる。しかし、茅盾の1920年代末から40年代に至る作家活動に

においては、「偉大な共産主義の戦士」といった評価とは重ならない精神の有り様がみられる。本稿ではそれを「作家精神」と呼び、茅盾の「作家」としてのパーソナリティを抽出することに努力を払った。そのため、まず第1章では『蝕』三部作の人物像に注目し、左翼理論を用いて物語を主題に従属させたとしばしば否定的にいわれる茅盾小説の「主題先行」という特徴が、『蝕』においては当てはまらないことを示した。

第1章における整理をふまえて、第2章以下、「作家精神」が形成されていく様子を追った。『蝕』三部作は、第1部『幻滅』、第2部『動揺』、第3部『追求』によって構成される。『幻滅』は章静という女性主人公の革命や恋愛への幻滅を通して、ある一人の青年が国民革命にどう対処したかが描かれる。第3章では、一般に幻滅を繰り返すだけだととらえられ、茅盾自身にも彼女の前途は「一面の灰色」と述べられる章静の形象が、必ずしも消極的方向性を持つとは限らず、『幻滅』はむしろ章静の成長物語であると指摘した。また、『幻滅』に述べられた章静の心理的成長の方向性は、茅盾のそれとかなりの部分で一致し、そこに社会変動に直面した女性の、恋愛や革命に対する複雑な感情を組み合わせたものであることを明らかにした。

第4章では『蝕』第2部『動揺』について、登場人物の多くに共通するとまどいが、国民革命当時の政治的社会的背景からして必然的なものであり、それが国民党と共産党、さらにはコミンテルンの政策の違いによってもたらされたものであることを明らかにした。茅盾にとって、革命失敗の原因は革命陣営内部の矛盾に求めることができ、茅盾の幻滅も直接にはそれに起因する。ただし、社会矛盾に対する幻滅は、やがて自らの能力や理論にまで波及し、茅盾は自己省察の必要を悟る。彼が自己省察に向かう起点が『動揺』に見られることを指摘した。さらに、『動揺』のモデルとなった事件を、かつて茅盾が編集長を務めた『漢口民国日報』の記事から洗い出し、それが湖北省鍾祥県において実際に発生した「五二八惨案」と呼ばれるものであることを明らかにし、事件の概要を示した。「五二八惨案」は、土豪劣紳と匪賊の策動が大規模な白色テロに発展した、国民革命の失敗を印象づける典型的な事件であり、また、この事件の特徴こそが『動揺』後半部に顕著な緊迫感を創り出したことを指摘した。

第5章では、茅盾が愛読した北欧神話における厳格な運命の枠組みが、『動揺』のプロットに強く影響したことを明らかにし、また茅盾が現実を理解する際にも、運命が大きな位置を占めることを指摘した。また、『蝕』第3部『追求』において、現在進行形の社会風俗を描くにあたり、1920年代の茅盾が有していた甘さを自ら笑い飛ばし、時代の省察へと向かう様子が、短篇小説「創造」に現れていることを明らかにした。

第8章では、茅盾が現在を司る北欧の運命の女神ヴェルダンディを精神の先導としたことに注目し、茅盾の現実観が現在に限定された非常に特殊なものであることを明らかにし、また1930年前後において、十月革命後のロシア思潮の影響が大きくなること、それが「作家精神」の発展と一定の関係を有することを指摘した。第9章では、茅盾の『蝕』や『野薔薇』を痛烈に批判した銭杏邨との認識の相違を、茅盾の「論無産階級芸術」、「從牯嶺到東京」、「読『倪煥之』」、「写在『野薔薇』的の前面」等に対する銭杏邨の評価を見る中で跡付けた。銭杏邨は日本の文芸批評家蔵原惟人の影響を受けることで批評原理を転換したが、茅盾もまた国民革命の前後で「作家精神」の獲得によって現実認識を大きく変化させており、銭杏邨の茅盾批判が茅盾の変化に起因することを明らかにした。

終章においては、これまで追ってきた「作家精神」の内実を明確にするとともに、それが茅盾の代表作『子夜』に結実する様子を「私論」としてまとめた。

茅盾は当初自らの幻滅を脱却すべく、幻滅をもたらした原因であるところの現実社会を分析したが、その際に現状の不条理を運命の枠組みを導入して把握した。また悲観消沈から抜け出すため、北欧の運命の女神ヴェルダンディを自らの精神の先導とした。茅盾は現在を過去や未来から切り離した上で、それを唯一の奮闘対象とした。厳格な運命に支配された現実にあって、現在だけは自らの意志による働きかけが可能であり、このことの発見によって茅盾は頹廢から免れ、やがて自らの幻滅を中心的課題とするのではなく、絶望へ抗戦を挑むべく、今度は社会の客観的分析の方に重心を置くようになる。その際には社会科学の理論を積極的に取り込む必要がでてくるが、しかしそれを現実を支配する運命の枠組みの中に置くことによって、様々な階級の人々の悲喜劇を立体的に描くことが可能となった。物語の結末は必然として提示され、必ずしも確固とした理由付けがなされるわけではないが、不可知な事象を必然としてのみ提示する茅盾の小説は、結果的にかえってリアリティを獲得することにつながったと見られる。「作家精神」の特徴として挙げられる現実主義的態度、現在への執着、暗黒との闘争、運命の枠組み等は単なる名詞であり、その時々で現れ方も異なるが、その一つ一つが有機的なつながりを持って連動するとき、1 + 1 が3以上になるような効果を上げることになる。茅盾の場合、それがあくまでも「作家」の部分において有効なのだと結論した。